

## 日韓の詩人交流の経験から

佐川亜紀（詩人）

私は、2014年に韓国の昌原市が後援している第五回昌原KC国際詩文学賞を受賞しました。ドラマ「冬のソナタ」で韓流ブームが盛り上がったのに、ヘイトスピーチが吹き荒れ、日韓関係が危ぶまれた時期でした。主催者、選考委員の方々は、このような時だからこそ、日本の詩人に授与したいと思われたそうです。温かい配慮と深い知性に敬服しました。私は第一詩集『死者を再び孕む夢』に、神奈川県相模湖ダム建設のために強制労働をさせられ、犠牲となった朝鮮の人々についての連作を収めました。徴用工問題に通じます。

片側だけの歴史のページ／空白さえない押しこめられた残酷さ／あなたの魂を静かに呼んだ人がいて／あなたの魂まで自分の足で歩こうとした人がいて／あなたのことがわずかにわずかに見える／とても呼びもどせないほど／遠い魂（「湖の底で」部分）

一方、第三詩集『返信』に収めた「りんご人」という風変わりな題の作品は、韓国の読者にもっとも受け入れられ、詩誌や女性新聞で紹介されました。「りんご」は韓国語でサグアと言い、私の筆名と似ていて、サグアがハングルで「謝罪」を意味する語と同じつづりなのです。これらから謝罪しきれていない日本人であることの恥かしさ、もどかしさを書きました。戦後50年経ってから、植民地支配の謝罪をしたのはあまりに遅く、しかも村山談話、河野談話も日本で年々薄められ、ぼかされ、安倍政権になってから、教科書検定が厳しくなり、言葉の意義がねじ曲げられ、日韓の若者の歴史認識に大きな違いを生じているのはたいへん残念なことです。

2017年9月には平昌オリンピックの成功を願う行事として韓中日詩人祭に参加しました。軍事境界線近くで平和を祈る朗読会が開かれたころ、日本ではミサイル通過で大騒ぎだったので、危機をあおりすぎと驚きました。さらに、11月には光州で開かれた「第一回アジア文学フェスティバル」に参加しましたが、テーマは「アジアの夜明け」でした。韓国の、アジアの夜明けが始まるという意欲を表現したのです。「夜」にしたのは日本ではないか。近代文学以来、ずっと日本は欧米文学に追随し、アジアを蔑視してきましたが、今後はアジアの一員として新しい文化を築いていくべきではないかとの予兆を受け取りました。

植民地時代の詩人たちの受難を忘れるわけにはいきません。日本に留学し、立教大学と同志社大学で学んだ尹東柱は、朝鮮語で詩を書き続け、思想犯として逮捕され、福岡刑務所で解放直前に27歳で獄死しました。尹東柱については大学同窓生や関係者の皆様の尽力で顕彰され、日本でも親しまれるようになりました。モダニストの李箱も来日したとき、「不逞朝鮮人」として西神田警察署に拘禁され、病氣釈放後26歳で死去したのです。この歴史を記憶することは、私たちの表現の自由を守ることにつながり、日本と韓国、朝鮮半島全体の人々との友好が文化の発展にとってもますます大切だと思います。

-----  
※さがわ・あき 2014年韓国昌原KC国際詩文学賞受賞。

2017年韓中日詩祭（平昌）、第一回アジア文学フェスティバル（光州）招待参加。

日本詩人クラブ賞、小熊秀雄賞、地球賞、横浜詩人会賞等受賞。日本現代詩人会理事。